

暗黒の欠片  
vol.6

丑の刻

奇怪伯爵

## 丑の刻

---

乾いた音が、私の心に響く。

それは、癒し？

それとも、増幅？

今の私には、答えが分からない。

心の内にある激しい感情を、私はどうすることもできない。

一時的には癒される傷も、完治はしない。

再び開き、剥き出しになってしまう。

一つの傷が癒えないまま、新たに追加される傷。

回復の見込みなど、無いのではないか？

手の施しようがないのではないか？

全てが、破滅に向かっているような気がして……。

全てが、取り戻せない気がして……。

頼れる人は、誰もいない。

私を癒す人は、誰もいない。

私は、それが可能だと思われた唯一の人に裏切られたのだから。

乾いた音が、私の心に響く。

私の感情が、打ちつけられていく。

誰もいない空間で、私はその行為に没頭する。

今の私は、どのような表情をしているだろう。

醜い顔をしているだろうか？

悲しい顔をしているだろうか？

どちらにせよ、人に見てもらいたくない顔であることは確かだ。  
もともと、人から褒められたことなどない。  
他人の顔を褒め、憧れることはあっても、その逆は一度もなかった。  
他人と較べる度に、劣等感が積もっていく。  
青春時代という言葉すら嫌いだった。  
人が恋を覚え、恋を始め、恋に期待する時代。  
誰もがときめきを覚える時期に、私は早くも失望していた。  
人並に、好きになった人はいた。  
憧れた人は、いた。  
夜更けに流れるラジオを聴いて、勇気を出して手紙を書いた。  
告白した自分を想像して、ハッピーエンドを夢見たこともあった。  
一つだって、叶うことなどなかった。  
直接的な行動を取らなくても、答えは自然と聞こえてきた。  
非道い言葉と、蔑んだ視線。

恋愛に期待しなくなった私は、空虚とともに平穏な生活を送ることができた。  
人と最小限に接していれば、トラブルも起こらなかった。  
陰で何か言われていたかもしれないが、それすら聞こえてこない距離を保った。  
私の生活は、私の望むペースで営まれていたのだった。  
そう、彼が現れるまでは……。

彼の表情が、浮かぶ。  
私の感情は高まり、うねり、体内を駆け巡る。  
行き場を失った黒い感情が、私の表情を変えていく。  
冷たい夜気ですら、私を冷ますことはできない。  
私の右手は、さらに力を増していく。  
乾いた音が、深夜の森にこだまする。

彼は、私に無いものを持っていた。  
屈託のない笑顔と、人懐っこい性格。  
一昨年の新入社員として、私と同じ職場に配属となった。  
私が仕事を教えることになったが、彼は物覚えも良かった。  
先輩と後輩の仲。  
始めは煩わしさを感じていたが、業務上仕方のないことだった。  
私が距離を保とうとする一方、彼は逆に踏み込んできた。  
それは、私にとって初めての経験であり、せっかく私が固めてきた殻を打ち破ろうとするものだった。

彼と一緒に時間を。

仕事にも関わらず、笑顔を浮かべる時間が増えた。

生活のためだけだった会社生活に、楽しさすら見出すようになった。

やがて、私たちは会社の先輩・後輩という関係を超えた。

彼の思いもよらぬ告白に、私は捨てたはずの感情を甦らせたのだった。

幸福の日々。

そういう生活に浸りながら、それでも私は不安だった。

この生活が、いつまで続くのか？

突然の終りが、やってくるのではないか？

彼が、結婚の話を切り出したとき、私は安堵した。

幸福の陰に貼りついていて不安も、これでようやく消える。

今迄の人生は、この日のための布石だった。

私は、叫びたいくらいの喜びを噛みしめた。

一度は諦めた結婚生活。

一人の方が気楽でよいという強がりが、偽りだったと知った。

心のどこかで、私は誰かを求めている。

その誰かが、ようやく現れた。

そのことに気づかせてくれたのが、彼。

別れは、突然にやってきた。

一方的な、宣告。

私の夢が、脆くも崩れ去っていく。

やはり、とも思った。

私に、幸せなど来るわけがない。

殻を破るべきではなかった。

そうすれば、こんなに傷つくことはないのに。

自分の信条を曲げた代償は、涙が枯れてもなお残る大きな傷となった。

彼は、別れを告げる時も、あの笑顔を浮かべていた。

他に、好きな人ができた。

その人と、結婚する。

相手は、彼の翌年入社した新入社員の女性だった。  
父親が大手取引先の役員だとは、噂で知ったことだ。  
会社には、私と彼の関係は伝えていなかった。  
もともと、最小限の交流しかしていない私だ。  
誰も気づいていなかったし、彼も周囲に伝えることはしていなかった。

別れを宣告されながら、会社で毎日顔を合わす。  
何事もなかったように、挨拶をする。  
何事もなかったように、業務を依頼する。  
ただ、それだけの関係。  
そして、次第に近づく彼の結婚式。  
何食わぬ顔で、彼も彼女も幸せを披露する。  
誰かが下世話な冗談を飛ばし、周囲が盛り上がる。  
生き地獄というのは、こういうものか。  
私は、必死に感情を抑えた。  
我慢すれば、この感情はきっと消えてくれる。

消そうとして、消せない。  
何かに没頭して、少しでも忘れられたらいい。  
そう思って、いろいろ試してみても、彼の顔が浮かんでくる。  
二人の時間が、くっきりと思いだされる。

あの時間。

彼は今、別の相手とそれを作り上げている。  
どうしようもない喪失感に脱力し、どうしようもない怒りが込み上げてくる。  
私は作業を中断し、スポーツバッグのファスナーを開けた。  
中からタッパーを取り出し、蓋を開ける。  
包み紙を解くと、人形が姿を現した。

泥で作られた人形は、彼を見立てたもの。  
時には、彼の頭髪を中に忍ばせて。  
時には、彼の名前を書いた紙片を埋め込んで。  
それに唾液と毒虫を混ぜれば、効果があるらしい。

私は、人形を木の袂に置いた。  
前に置いたものは、形が崩れてしまったものもある。  
雨で崩れてしまったものもある。  
いったい、何体の人形を置いたのか？  
その数も、忘れてしまった。  
私の願いが、彼に早く届きますように。  
私は今日も、人形を置く。

私は、再び金槌を手にとった。  
目の前にある人形は、藁を縛って作ったもの。  
こちらも、中に彼の名前が埋め込んである。  
こんな古風なことを。  
人は笑うかもしれない。  
しかし、私にはこれしかできない。  
人に抗う力も持っていない。  
土足で私の領域に踏み込み、好き勝手に踏みにじった彼。  
私が受けた傷の重さすら、知るまい。  
私の存在すら、覚えていまい。  
ドロドロになった感情を、私は金槌に託す。  
人形の胸に釘が打ち込まれ、藁が裂ける。  
私の思いが、打ちつけられていく。  
呪いを背負った人形が、次第に数を増していく。

こんなことをやって、効き目があるのだろうか？  
最初は、自分の行為に虚しさを覚える時もあった。  
何度も、止めようと思った。  
しかし、次から次へと生まれる感情は、私の中に積もっていった。  
少しでも発散させないと、私はその重荷に押し潰されてしまっただろう。  
少なくとも、釘を打っているときは、それを軽減できる。  
僅かながらの抵抗が、私の中に生まれたのだった。

でも、今は違う。

私は、その存在をはっきり感じ取ることができる。

私の心を知った何か。

私の行為に興味を持った何か。

その存在を、日増しに強く感じ取ることができる。

彼女は、私の理解者であろうか？

ほら、今も背後から私をじっと覗いている。

それが人であろうとなかろうと、私には関係がない。

私は、力をこめて釘を打つ。

彼への思い出と、感情が釘に伝い、人形に届く。

私は、丑の刻に彼を恨む。

私は、丑の刻に彼を呪う。

私は、丑の刻に彼を想う……。

暗黒の欠片 vol.6 丑の刻

<http://p.booklog.jp/book/26156>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26156>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26156>